397ばんめの白いぞう

ルネ＝ギヨ作　那須辰造訳

世界の子どもの本

●世界の子どもの本・1

397 ばんめの白いぞう

ルネ＝ギヨ原作・那須辰造訳

N. D. C. 953　偕成社　昭和43年　176 P.　23 cm

Guillot, René : TROIS BONDS DANS LA JUNGLE. 1952.

©発行　昭和四十三年十月十五日

定価　四百三十円

訳者　那須辰造

発行者　今村　広

印刷者　小泉松三郎

発行所　東京都新宿区市ケ谷砂土原町二の四　株式会社　偕成社

本文印刷　新陽印刷有限会社

オフセット印刷　小宮山印刷株式会社

製本　文勇堂製本工業株式会社

訳者の了解により検印廃止　　落丁本・乱丁本はおとりかえします。

397ばんめの白(しろ)いぞう

ルネ＝ギヨ作／那須辰造訳

TROIS BONDS DANS LA JUNGLE

by René Guillot

1952

Original French text published by Editions Magnard, Paris, in 1964, from which *Le 397ème éléphant blanc* and *Mon frère tigre* are translated.

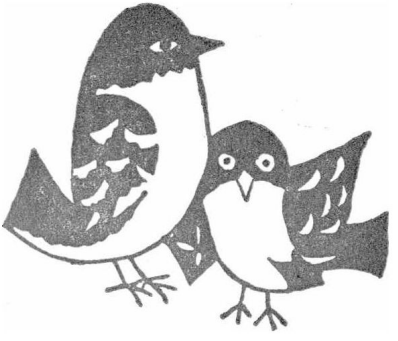
＊はじめに

ジャングルへいってみたいとおもいませんか。ぼくたちのだいすきな野性の動物――ライオン・とら・ぞう・きりんなどが、とびまわっているところです。ジャングルで、動物たちは、どんなきもちでいきているのでしょう。

この本を書いたギヨは、たびたびアフリカのジャングルへいって、野性の動物たちとなかよしになりました。そして、動物の物語をたくさん書いて、世界でも、すぐれた動物文学作家としてしられています。

ギヨの作品で、まだ日本のみなさんにしられていない物語を二編、ここにしょうかいします。ぞうとインドの王さまのおはなしに、とらと少年のおはなしで、どちらもほのぼのと心あたたまる物語です。

那須辰造



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

筆者紹介

原作者　ルネ＝ギヨ　1900年、西フランスに生まれる。大学卒業後、西アフリカで数学の教師をしながら、奥地を数回旅行。帰国後、少年むけの動物小説を書き、1964年には国際アンデルセン賞を受賞。

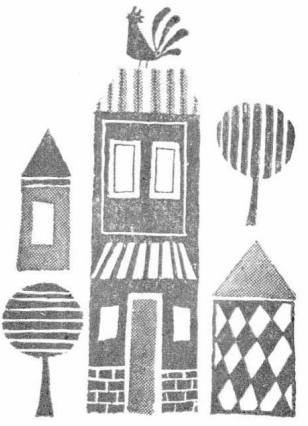
訳者　那須辰造　1904年、和歌山県に生まれ、東京大学仏文科卒業。現在、実践女子大学教授。創作「緑の十字架」や、フランスを中心とする外国児童文学の紹介などで、長年子どもの本に尽力されている。

（397ばんめの白いぞう）

大きな白いぞうが、すずをふって、岩の上にあらわれました。

●もくじ

397ばんめの白いぞう



397ばんめの白いぞう……12

二ひきの白いぞう…12

ごてんの かなしみ…14

小さい王さま…22

ぞうがり…31

すばらしいぞう ホンモモ…43

ホンモモは、だれとはなすのだろう…49

大きなぞうの おくりもの…62

三百九十七ばんめの小さいぞう…79

ぼくのきょうだいコプ……92

ジャングルのしけん…92

お月さまをもった少年…105

しかけたわな…115

おまえは、ぼくのきょうだい…124

とうぞくたちにさらわれて…134

ぞうのかしらトン＝チュ＝マク…145

とうとうにげたサオ…156

解説…174

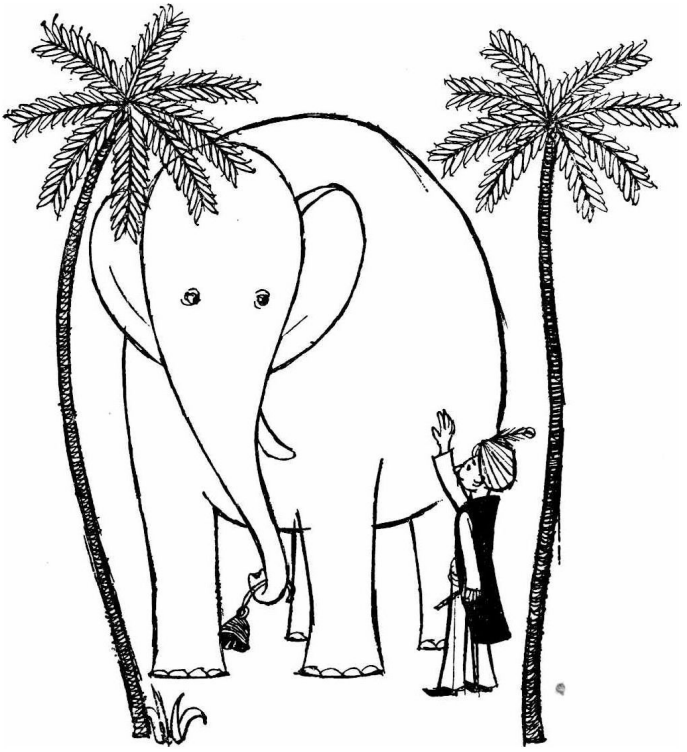
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

表紙・口絵
さし絵　池田竜雄

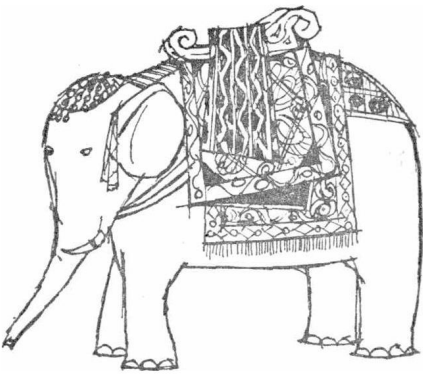
見返し・扉
目次カット　司修

397ばんめの白(しろ)いぞう

ルネ＝ギヨ作
那須辰造訳



＊397ばんめの白いぞう



二ひきの白いぞう

このおはなしは、インドのでんせつです。おなじ名まえのぞうが二ひきでてきますが、「へんだなあ。」とおもわないでください。その名まえは、ホン＝モというのです。

「モ」というのは、ぞうがりにつかう、大きなすずのことです。ぞうがりの人たちは、この「モ」をガランガランとならしたり、かんからをガンガンたたいたりして、ぞうをおどし、ふかいやぶの中からおいだすのです。

「ホン」というのは、えらい人をよぶときのいいかたです。「ホン」と「モ」をくっつけ

ると、「すずのとのさま」とか、「すずのだんなさま」とかいうことになります。

これからおはなしする二ひきのぞうは、このホン＝モという名まえでした。二ひきとも、たいそうめずらしいぞうです。

うまれつきの大きさは、まったくちがっていましたけれど、この二ひきのホン＝モには、たいそうよくにたところがありました。どちらもまっ白で、どちらも、さいしょに王さまにつかえた先祖からかぞえて、三百九十七だいめでした。三と九と七……どれも、しあわせにかんけいある数ですね。そうです、おなじ三百九十七だいめで、おなじように白いぞうだったのです。

ところが、この二ひきには、たいそうちがったところもあったのです。二ひきのうち一ぴきは、すごく大きくて、もう一ぴきは、それはそれは小さいのでした。どれぐらい小さいかというと、二本のゆびさきでつまんで、虫めがねで見ると、やっと大きく見えるくらいでした。それでも、ばかでっかいほうのホン＝モの目だまよりも、ずっと小さいのです。そして、ふしぎなことには、この小さいホン＝モのおとうさんは、すこしも小さくなかったのです。

インドでは、白いぞうは、神さまにおつかえするぞうだといって、たいせつにされます。ですから、けしつぶみたいに小さくたって、この小さいホン＝モも、なかまのたいしょうで、とうといぞうだったのです。

大きいホン＝モも、もちろん、なかまのたいしょうで、とうといぞうでした。けれども、このぞうには、子どもが一ぴきもいないのでした。

おやおや、なんだか、はなしがこんがらがってきましたね。大きな白いぞうと、小さな白いぞうが、ごちゃごちゃにならないように、もう一ど、さいしょからおはなしすることにしましょう。

まず、大きいホン＝モのことからはじめましょう。

ごてんのかなしみ

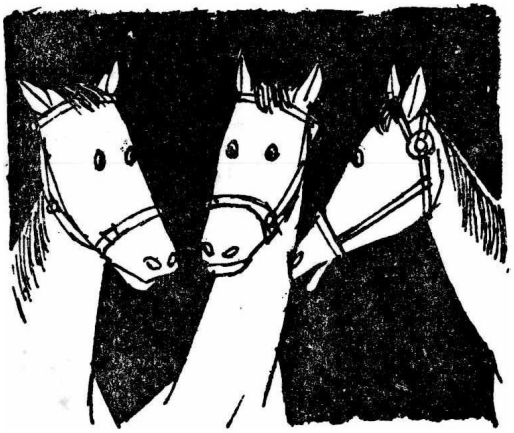
さて、この国の王さまのごてんには、けさ、たいへんなことがおきたのです。

けれども、この国をおさめている子どもの小さい王さまには、まだ、そのことをしらせ

てありませんでした。小さい王さまは、ねむっていらっしゃるので、おこすわけにはいかないのです。

ごてんのうまやには、たくさんの馬がかってありました。まい朝、馬ばんの人たちが、どっさりむぎをもっていってやります。そのときには、いつも馬たちは、ゆうべごてんになにがあったか、しっています。

けさも、馬ばんたちがはいっていったときには、馬たちは、どんなにたいへんなことがあったか、わかっているようでした。はなさきをすりよせて、ひそひそはなしあっていました。なにかかわったことがあるときには、きっと、こんなふうに、はなをすりよせているのです。



ごてんのうら庭には、ぞうの、ひろいかこい場がありました。ゆかには、だいり石がしきつめてあって、たくさんのぞうがかってありました。

ぞうたちは、夜は、くさりでくいにつながれていますが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com